
ポケモン不思議のダンジョン～零の探検隊～

猪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ポケモン不思議のダンジョン〜雫の探検隊〜

【Nコード】

N2076Z

【作者名】

猪

【あらすじ】

ゼニガメとなり、記憶も無くした元人間のシズクに、臆病だが、心優しく正義感が強いヒノアラシのエン。ひよんなことで出会ったこの二人は、探検隊になるべくギルドに弟子入りする。しかし、そんな二人を待ち受けていたのは、時と闇をめぐる壮大な冒険だった。

猪が執筆する、ポケダン二次創作小説第2弾！！

プロローグ（前書き）

こんにちは、作者の猪いのししです。ポケダン二次創作小説第2弾幕開けです。相変わらず低い文章力ですが、こちらも最後までお付き合いいただければ幸いです。

プロローグ

「うわっ！！！！」

「！！だ…大丈夫か！？」

痛い、ものすごく痛い。

目の前が…ぼやけてきた…。

「し、しっかりしろ！！手を離すなよ！！」

「うっ………」

「うん」って言ったかったのに……うめき声しか出ない……

「……………終わりだ。」

！！あいつ、手に力が集まって……まずい、このままじゃ……！！

「手を……離して……。君まで……巻き込ま……れる……」

よかった、声が出た…。

「だめだ！！お前を見捨てるもんか！！」

なっ！！道連れになるつもり！？

だ、だめだよ！！君まで巻き込むわけには……だって君は、僕の……

大切な……

「死ねっ!!」

!!もう、時間がない……!!

「離……すんだ!!」

「なっ!!」

……ごめん、突き飛ばしちゃったね。でもよかった……あいつの攻撃が当たらなくて……。

……何か……叫んでる?でも、聞こえない……何て言ってるんだろ??

……意識が……遠のいて……い……く……

……ここは……どこだろう……?

……波の音が……聞こえる……。

.....
どこかの.....浜辺かな.....？

.....だめだ.....また.....意識が.....

プロローグ（後書き）

はい、短いです（笑）

「葉の救助隊」を読んだ方なら、この始まり方には見覚えがあると思います。別に意識したつもりはありません。

……………正直に言えば、他に始まり方が思い付きませんでした（泣）

ゼニガメとヒノアラシ（前書き）

ようやく第2話の投稿ができました。ちょっと考える時間長すぎたかな…？

シズク「関係ないけど、作者昨日テストが終わったんだよね？」

そうだけど、それが何か？

エン「どう？赤点とる自信は？（笑）」

な、なぜそんなことを聞く！？エンよ！？

エン「だって作者、テスト休み中勉強すっぽかして小説書いてばかりだったみたいだし（笑）」

シズク「だから、作者の答えはぼろぼろなんじゃないかと思って心配してあげたんだよ（ニヤリ）」

くっ、そんな笑みを浮かべて白々しい……

（前にも言ったような気がするが…）ここではテストの話は禁止ね。

ゼニガメとヒノアラシ

「……すごい嵐……。」

切り立った崖の中腹にある空洞で、あるポケモンがつぶやいた。その崖は、外から見るとサメの頭部に酷似しており、ちょうどその口に当たる部分に空洞がある。

「なんだか……嫌な予感がする……。」

ポケモンがさらに言った。そのポケモンは、丸い顔から突き出た少し長めの鼻に丸い胴体、開いているのか分からないほど細い目、手は小さく足は太めで前かがみだが二足歩行、頭から背中にかけては青い、お腹から顔にかけてはうすい黄色の毛に覆われ、最後に背中には炎を出すための穴が四つ空いている。ヒノアラシだ。ヒノアラシは誰かに話しているわけではなく、独り言を言っていたようだ。

その時、すぐ近くに雷が落ち、轟音を響かせた。

「ヒヤアアアアア!!」

ヒノアラシは驚いて、悲鳴をあげながらしりもちをついた。

「び、びっくりした……。」

そして立ち上がり、顔をしかめた。

「こんな日はもう寝よう……。」

そうやってヒノアラシは、背後に敷いてある干し草のベッドに向かった。

翌日の朝

昨晚の嵐が嘘のように晴れ、暖かい陽気が降り注いでいた。

「……………」

そんな中、昨晚のヒノアラシが小さなウエストバッグをつけて、緊張した表情である場所に向かっていった。

着いた場所は、小高い丘の上にあるテントだった。そのテントは、丸くてピンク色の身体、頭からは二本のウサギのような耳が生え、大きな丸い目をしたあるポケモンをモチーフにしたものだった。そのテントの前には、格子が張られた穴があった。

「……………」

ヒノアラシは緊張した表情のまま、その穴の前まで行くと、しばらく硬直した。

硬直を解くと、ヒノアラシはため息をついて言った。

「やっぱりだめだ……………今日こそはって思ったんだけど……………踏ん切りがつかないや。」

しばらく考えたあと、突然何かを振り払うかのように頭を振って言った。

「こんなんじゃないだめだ!!いつまでも弱虫のままじゃ!!」

そのあとヒノアラシは、ウエストバッグを開けて、その中から小さな石のかけらを取り出した。その石のかけらは円錐形で、底面にあたる部分に、不思議な幾何学模様が描かれていた。それを見ながらヒノアラシは言った。

「今日はボクの……宝物まで持ってきたんだから!!」

ヒノアラシはバッグにそれをしまい、そのあと大きく足を振り上げた。

「この宝物がボクに勇気をくれる……そう信じて……!!」

そして足を勢いよく落とす。

「大きな一步を踏み……」

そこまで言った時だった。

落とした足が格子を張った穴の上についた。
その瞬間、

「ポケモン発見!!ポケモン発見!!」

突然穴の下から大きな声が聞こえてきた。

「誰の足形?誰の足形?」

聞き返すようなまた別の大声が聞こえた。

「足形は……………」

「ヒャアアアアア!!!」

あまりにも驚いたヒノアラシは、鋭い悲鳴を発しながら、真後ろを向いて一目散に逃げていった。

「……………おい、あいつが持ってたやつ、見たか？」

「ああ。宝物とか言ってたな。」

その様子を陰から見っていたポケモンが二人いた。一人は紫色の丸い身体、足はなく身体の側面に空いた穴からガスを出して宙に浮いている。もう一人は青いコウモリのようなポケモンで、目はなく大きな口に牙がある。ドガースとズバットだ。

「……………狙うか？」

ドガースがズバットに聞いた。

「ああ、あいつも弱そうだしな。」

ズバットがニヤリとして答えると、二人はヒノアラシの後を追った。

「……………う……………ん……………」

そのころころは、先ほどの場所からほど近い海岸。そこに倒れてい

た一人のポケモンが、目をさました。

「……………海岸か。一体どこ……………」

そう言つてポケモンは身体をわずかに起こした、その時、

「……………アアアアアアアア！！！」

「？……………ぐふっ！！？」

突然聞こえてきた奇声にポケモンが横を向いた瞬間、何か顔面に激突した。

「あつ！！わあああ……………！！！」

激突したのは、先ほどのヒノアラシだった。そのヒノアラシは、そのまま勢い余つて砂浜を転がった。そしてようやく止まると、頭をさすつて起き上がった。

「う〜ん、いたたた……………あつ！！！」

ヒノアラシは自分がつまづいた場所をみて、倒れている。顔面にぶつかられ再び意識を失つた。ポケモンに気付き、急いで駆け寄つた。

「ちょっと！キミ…大丈夫？」

ポケモンは今度はすぐに意識を取り戻し、顔を押さえながら起き上がった。

「うう、顔が痛い……。」

「ご、ごめん、ボクがぶつかったから……。」

ヒノアラシが謝った。

「気をつけてよ……。えっ!？」

ポケモンはヒノアラシを見た途端、驚愕の表情をした。

「どうしたの?」

不思議そうな表情をしながらヒノアラシが聞くと、ポケモンが言った。

「ヒ、ヒノアラシが…しゃべった!？」

その言葉にヒノアラシはさらに不思議そうな表情をし、

「?…ボクがしゃべるのが、そんなに不思議?」

と言った。

するとポケモンは、今度は眉をひそめた。

「え?ポケモンが話すのは普通なのかい?」

「うん。そもそもゼニガメのキミも、しゃべってるじゃん。」

この言葉を聞き、ゼニガメと呼ばれたポケモンは身体中を見渡した。彼の目には、水色の手足、胸部から腹部にかけて丸い甲羅状のもの、

さらに後ろを向いて下を見ると、水色の尻尾が見えた。

「……うそだろ……」

ゼニガメは信じがたそうに波打ち際に行き、水面に映る自分の顔を見た。そこには、水色の丸い顔が映った。その顔が認識できてくると同時に、大きな目に驚きの色が浮かんでいき、そして叫んだ。

「僕……ゼニガメに……なってる!!」

「なってるって、もとからゼニガメじゃないの？」

ヒノアラシが眉をひそめて言った。

「ち、違うよ……僕は人間だよ!!」

ゼニガメがパニックになりながら答えた。
するとヒノアラシは、驚きながら言った。

「えっ？人間！？でもどう見てもゼニガメじゃん!!」

「……そう……だよね……」

そのことがまだ信じられないゼニガメは、再び身体中を見渡し、さらに頬をつねり、夢じゃないことを確かめた。

そんなゼニガメに、ヒノアラシが今度は探るような目つきで尋ねた。

「キミ、なんか怪しい……ボクのことだまそうとしてる？」

その言葉に、ゼニガメはヒノアラシの目を見て答えた。

「いや、そんなつもりはないよ。」

「じゃあ、名前はなんていうの?」

ヒノアラシの問いにゼニガメが答えようとした。しかし、

「僕の名前は……っ!!君、後ろ!!」

ゼニガメは突然叫んだ。ヒノアラシの背後にいる、悪意に満ちた表情を浮かべる二人のポケモンに気付いたからだ。

「えっ?」

ヒノアラシは振り返ろうとしたが、その前に二人のポケモンは行動を起こした。

「くらえ、”体当たり”!!」

そう言っつてヒノアラシに突っ込んだポケモンは、先ほどのドガースだ。

「あっ!!」

その衝撃でヒノアラシはバランスを崩した。しかし彼が倒れる前に、同じく先ほどのズバットが彼のウェストバッグに向かって飛び付いた。

「へへっ、いただきぜ!!」

そう言つてズバットは、ヒノアラシからバッグをひったくり、それと同時にヒノアラシはうつ伏せに倒れた。

「いたたたた……あっ!!」

起き上がったヒノアラシは、バッグをとられたことに気付き、ドガースとズバットを見た。二人はそれを見て、いやらしい笑みを浮かべた。

「それボクの宝物!!返して!!」

ヒノアラシがそう言つと、ドガースは、

「返してほしければ、力づくで取ってみな。」

と言つた。その言葉を聞くと、ヒノアラシは震えだした。その様子を見て、今度はズバットが言つた。

「やっぱり弱虫みたいだな、見た目通りだ。」

すると二人は、いやらしく笑いながら背後にある洞窟に向かった。

「あばよ、弱虫くん。」

ドガースが去り際にそう言つと、二人は高笑いをしながら洞窟の中に消えていった。

「……………うっう」

ヒノアラシはその場に座り込み、うつむいて泣きそうな顔をした。

そんな彼に、一連の出来事を見ていたゼニガメが声をかけた。

「君、このままでいいのかい？悔しくないのかい？」

その言葉にヒノアラシは、か細い声で答えた。

「悔しいよ……あんなこと言われて……宝物まで盗られて……」

ゼニガメがさらに言った。

「だったら追いかけて取り返せばいいじゃん。」

ヒノアラシがまた答える。

「でも……ボク一人じゃ……あいつらは二人だし……勝てないよ。」

「そんなのやってみなきゃ分からないよ。」

ゼニガメがさらに言ったが、今度はヒノアラシは返さずに、とごと
ううずくまって泣き出してしまった。

その様子を見たゼニガメは、ため息をつくとある提案をした。

「じゃあ僕が手伝ってあげるよ。それなら二対二だから、君の勝率
も上がるだろ？」

その言葉を聞いた途端、ヒノアラシは涙が浮かぶ目でゼニガメを見
た。

「何で見ず知らずのキミが？」

ゼニガメは答えた。

「君は僕のことを疑ってたから、信じてもらおうと思って…それに……」

ここでゼニガメは、少し顔をしかめた。

「僕もあの二人になんとか腹が立ってね。」

するとヒノアラシは立ち上がり、涙を浮かべながらゼニガメに言った。

「あ、ありがとう。そんなこと言うキミが、悪いポケモンのはずないよね。疑ってごめん。キミは、えっと……」

ゼニガメはここで、さっき自己紹介を中断したことを思い出した。

「ああ、そういえば名乗ってなかったね。僕はシズク。穿ウガチシズクシズク。よろしくね。」

そう言っつてシズクと名乗ったゼニガメは、手を差し出した。するとヒノアラシは、

「ボクはエン。よろしく！」

と言っつて、シズクの手を握った。

シズクはそのあと、後ろの洞窟の方を向いて言った。

「じゃあ、行こうか。」

ゼニガメとヒノアラシ（後書き）

シズク「随分長かったね。」

うむ…（汗）思いのほか長くなってしまった。

エン「第一章終わるのにどれくらいかかるかな？」

ま、まあ、それはやってみなきゃ分からん（汗）
こんな調子ですが、これから先もお楽しみに

海岸の洞窟（前書き）

遅くなりましたm（――）m
約1週間ぶりの投稿です。いろいろ忙しかったもので……

シズク「具体的に何があったの？」

まず製図の課題（一応工業高校生）、部活の大会の応援、部屋の掃除、あとは、投稿した話の修正も。機会があれば読んでみてください。ほぼ全話修正しました。

エン「全話修正って、本当に忙しかったの？（汗）」

海岸の洞窟

湿った空気が漂う洞窟内で、シズクとエンはバッグを盗んだ二人を探して歩いていた。

洞窟はあまり広くないものの分かれ道が多く、二人は少々迷いながら進んでいた。

ある分かれ道に来たときに、エンがうんざりしたように言った。

「また分かれ道だ……。」

そんなエンにシズクが言った。

「誰かこの洞窟に詳しいポケモン、あるいはあの二人を見たポケモンがいれば助かるんだけど……。ん？」

その時シズクは片方の道から来た一人のポケモンと目が合った。青くぐにやぐにやしたウミウシのようなポケモン、カラナクシだ。シズクが言った。

「彼に話を聞いてみよう。すみません、ちょっと……」

「あつ、シズク！ やめたほうが……」

エンが制止したが、一歩遅かった。

「泥かけ」！！」

そのカラナクシが突然シズクに泥をかけてきたのだ。

カラナクシの技をまともに受けたシズクは、

「うわっ！！め、目に泥が……！！！」

と言いながら両手で顔を押しさえてのけぞった。そんなシズクにニヤリとしながらカラナクシが攻撃しようとして近付いた。しかしその時、

「た、“体当たり”！！！」

震える声でそう叫んでカラナクシに突撃したのは、エンだった。突然の攻撃にカラナクシは、驚きと痛みで悲鳴をあげながら吹き飛んで地面にのびた。

「大丈夫！？シズク！！！」

エンが急いでシズクに駆け寄った。シズクは目をぬぐいながら答えた。

「うん。でも…よく見えないよ…。」

「泥を洗わないと。」

エンはそう言うと、シズクの手を引いて水がある場所を探した。

しばらく歩いた二人は、小さな潮溜まりを見つけた。シズクは手に水をすくい、目を洗いだした。

「君はさっき、カラナクシに話しかけようとした僕を止めようとしたけど、あれはどうしてなんだい？」

シズクが目を洗いながらエンに尋ねた。

「最近は何事なことが多くて、さっきみたいに突然ポケモンに襲われるような事件が増えてきてるんだ。」

エンが答えた。

ここでシズクはあることにピンときて、言った。

「なるほど、だからキミは僕と会ったとき、疑ったんだ。」

「うん。」

エンがうなずいた。

それと同時にシズクは目を洗い終わり、頭を振って水を飛ばしたあと、エンに向きなおって言った。

「それにしても君、なかなか強いみたいだね。戦いに慣れてるのかい？」

エンは首を横に振って答えた。

「ううん、戦いなんて今日が初めてだよ。キミが危なくなっている所を見て、とっさに動いちゃっただけで、本当はすごく怖かったよ。」

その時のことを思い出してか、エンがかすかに震えた。

そんな彼に、シズクがすまなそう言った。

「ごめん、僕のせいで時間が無駄になったばかりか、君に怖い思いをさせたみたいだね。」

「うっん、気にしないで。キミが無事で良かったよ。」

エンが優しい笑みを浮かべて言った。しかしその言葉は、逆にシズクの罪悪感をかきたてた。

「必ず…バッグを取り返そうね。」

シズクは決意したように言うと、エンもうなずいた。

「うん！必ずね！！」

再び二人は足を進めた。

「これが宝物だあ？ただの石ころじゃねえか。」

「でもこの模様、少し気になるな。」

洞窟の最深部でエンからバッグを盗んだ二人　ドガスとズバツト　が、バッグの中から出てきた石のかげらを見つめながら話していた。

「何か意味があんのか？たとしても、オレ達には分かんねえな。」

ドガースが言った。

「…マニアか物好きにでも売るか？でもなきや、一文の価値にもならないぜ、きつと。」

ズバットが言葉を返した。

「そうだな、バット。ちえっ、ヘタレの宝は所詮、持ち主同様価値無しか。」

「うまいこと言うな、ガス。」

ガスと呼ばれたドガースと、バットと呼ばれたズバットは、二人で笑いだした。

その時、

「宝物の価値なんて、本人にしか分からないよ。」

という誰かの声が響いた。ガスとバットは同時に声がした方を向いた。

そこには冷たい目付きのシズクと、恐怖と同時に怒りに満ちた表情のエンが立っていた。

「他人の宝が自分にはがらくた同然……そんな当たり前のことも分からずに、エンから盗んだのかい？」

シズクが冷たい目付きに笑みを浮かべて言った。

ガスは険しい表情になった。

「なんだお前、弱虫くんと一緒にいたヤツが、カンケーねえだろ。」

するとエンが一步前に出て、震えながらもしっかりとした声で言った。

「ボ、ボクの宝物返せ！！」

その言葉に、今度はバットがニヤリとしながら言った。

「言っただろ？返して欲しければ、力づくで奪ってみろってな。」

そのあとバットは、バッグに石のかけらを戻すと、ベルトの部分をくわえて持ち上げ、揺らした。

「ほーれ、どうする？宝物はすぐそこだよー。」

ガスがニヤリとして、馬鹿にしたような口調で言った。

エンは難しい表情をしていた。相手に対する恐怖と、取り返したいという思いがせめぎあっているようだ。

その時だった。

「しょうがないな、“水鉄砲”！！」

「があっ！！」

そう言ってバットに水を吹いたのは、シズクだった。攻撃をまともに受けたバットはのけぞった。しかし、バッグは離さなかった。

「えっ！？シズク、なにしてるの！？」

シズクの突然の行動に驚いたエンが言った。

「だって、力づくで取り返せって言うから…だから、実力行使に出たわけ。」

そのころ体勢を立て直したバットが、多少苦しそうにしながらも怒鳴った。

「よくもやりやがったな!!」

「ど、どうするの!?!かなり怒ってるよ!!!」

エンが泣きそうな顔でシズクに言った。

シズクは肩をすくめて、

「まあ、話してもらちがあかなそうな相手だから、仕方ないよ。」
と返した。

するとガスとバットはそれぞれ、

「いい度胸だな、相手してやるぜ!!!」

「後悔させてやる!!!弱虫が!!!」

と怒りに満ちた声で叫ぶと、シズクとエンに向かっていった。

海岸の洞窟（後書き）

なんか、思ってたより短くなってしまった（汗）

シズク「きつとまだまだ未熟なんだよ（笑）」

ムツ、君に小説執筆の何が分かるってんだ！！（怒）

エン「じゃあ逆に、作者には何が分かるの？（笑）」

……………サーセン、なんにも分かりません（泣）

争奪戦（前書き）

またようやくの投稿です（汗）

シズク「最近、投稿するペース落ちてきてない？」

うむ……アイデアが浮かばなくて……スランプとかってやつかな
（笑）

エン「キミはスランプになるほど熟練した作者なの？（汗）」

争奪戦

怒りながら迫ってくるガスとバット。
それを冷たい目付きで見つめるシズク。
エンは困惑しながら、その三人を交互に見る。
そして、

「くられ、体当たり”!!”」

「だったらこつちも…“体当たり”!!”」

攻撃しようと突っ込んできたガスに、同じ技でシズクが突っ込んだ。
二人は互いの技を相殺し、ガツツ、という鈍い音を響かせて止まった。

「ほら、来たよ！君も…手伝って!!”」

シズクが痛み顔に顔をしかめながらエンに言った。ガスも同じく顔をしかめている。

「あ……うん!!”」

エンが答えて行動を起こそうとした。
だがその時、

「俺を忘れてねえか、弱虫くん？“驚かす”!!”」

バットがエンに向かって技を繰り出した。

「うわっ!!」

突然の不意討ちに、エンが驚いて尻もちをついた。

「エン!!」

シズクが叫ぶと同時にエンの方を向き、ガスから目を離した。すると、

「隙ありだな。」

「え?あつ!!」

ガスがいやらしい笑みを浮かべてそう言いながら、シズクを押しきった。大きくバランスを崩したシズクに、ガスが技を繰り出した。

「“煙幕”!!」

黒い煙がシズクを包み込んだ。

「うっ、み、見えない!!」

シズクは煙幕を振り払おうとしたが、今度はバットに攻撃された。

「“吸血”!!」

バットはシズクの左腕にがぶりと食らいつくと、血を吸いだした。

「ぎゃああああ!!」

あまりの痛みにシズクは絶叫した。そして必死でバットを振り払うと、左腕を押さえた。しかしすかさず、

「今度は俺だ、“スモッグ”!!」

ガスが紫色の煙をシズクに吐き、それを吸ったシズクは、激しくせき込んで地面に膝をついた。

「シズク!!どこにいるの!?!」

やっと立ち上がったエンが叫んだ。シズクの周りにはまだ煙幕がかかっており、彼の姿を確認できない。

するとガスが高笑いしながら煙幕の中にいるシズクに罵声を浴びせた。

「ハッ!さっきまでの余裕はどうした?俺達の強さにびび……………」

その時だった。煙幕の中からすさまじい勢いで、一筋の水がガスの顔面に命中した。

「ぶはっ!!」

ガスは吹き飛んで、地面に激突した。それと同時に煙幕が晴れ、膝をついて血が一筋流れる左腕を押さえながら、顔色を悪くしながらも鋭い目付きでガスをにらみつけるシズクの姿があらわになった。

「シズク!!」

エンが、今度は安堵して叫んだ。

「み、見えなかったはずなのに……なぜだ!？」

バットが驚きながら言った。

するとシズクは、少し得意げにニヤリとしながら答えた。

「目が使えないなら、他の五感を使えばいいんだよ。例えば……耳とかね。」

そう、シズクはガスの声が聞こえる方向を正確に把握して、その方向に技“水鉄砲”を繰り出したのだ。

シズクはさらに続けた。

「それに、ゼニガメだから特性の“激流”が発動したのかな？強い“水鉄砲”を出せたのが幸いたよ。」

「くっ……だからこんなに痛えわけか……。」

起き上がったガスが、痛みで息を切らしながら言った。
すると不意にバットが鼻を鳴らした。

「ふん、ガスにちよつとダメージ与えただけで安心してねえか？俺もいるんだぜ？覚悟しろ!!」

そう言うと、シズクに迫った。しかし、

「させないよ!! “火の粉”!!」

攻撃をさせる前に、エンが行動を起こした。

口から小さな火をたくさん吐き、バットに攻撃したのだ。

「ぎゃあああ！！あちい~~~~！！」

バットが悲鳴を上げて、地面にボトリと落ちた。
エンはそれを見ると、険しい顔をして言った。

「もう、弱虫なんて言わせないよ！！」

その一言を聞くと同時に、バットは気を失った。するとシズクは、顔をしかめながら立ち上がり、軽くふらつきながらもガスに歩み寄りながら、

「そろそろ…止めにするよ。」

と言った。

しかし、少し歩いたところで、シズクは再び地面に膝をついた。

「うっっっ……」

「どうしたの、シズク!？」

顔を真っ青にしてうめくシズクを見て、エンが困惑した。

すると突然、体勢を立て直したガスが高笑いしながら言った。

「ハハハハッ！！俺の“スモッグ”で受けた毒が回りはじめてきたか！！」

「毒!？」

エンが驚きながら言った。

「ああ、じきにそいつは倒れるだろうよ。だが……」

ガスはそこまで言うと、顔をしかめた。

「生意気なやつがどうなるか…思い知らせてやる。」

するとまたニヤリとして、シズクに迫った。

「くらえ!! スモツ……」

「させない!!」

しかしガスが技を繰り出す前に、シズクが飛びかかり、ガスの口を両手で押さえた。

「ムフツ…!!」

ガスが妙な声を出した。しかし、シズクも大分体力を消耗している。今にも押し切られそうだ。

(くっ…このままじゃ……!!)

しだいに焦ってきたシズクは、必死で策をめぐらせた。

(“水鉄砲”を出したいけれど、今の僕じゃ、まともな技は出せない……後ろにはエンがいるけど、この位置関係じゃ、僕もただじゃ……ん!? いや、待てよ……)

ここでひらめいたシズクは、後ろでおろおろしているエンに、とき

れとぎれに言った。

「エン…！あいつに…向かって…“火の粉”を…！」

「ダメだよ、キミに当たる！」

エンが断ろうとしたが、シズクはさらに言った。

「考えが…ある…だから…早く…！」

「でも……………」

エンがまだためらっていると、ガスが口に一気に力を入れ、シズクを押し切るうとした。

「ああっ…！！僕を…信じて…くれ…！！さあ…早く…！！！！」

シズクが今にも負けそうな様子を見て、ようやくエンが決断を下した。

「分かった、信じるよ…！！“火の粉”…！！」

そう言うとエンは、先ほどと同じく小さな火をたくさん吐いた。

大量の火は、シズクとガスに向かって飛んでいく。

次の瞬間、シズクは勝利の笑みを浮かべると、頭を甲羅の中にひっこめた。

「！？うああ~~~~！！！！」

ガスがシズクに口をふさがれたまま、断末魔の叫びを上げた。

争奪戦（後書き）

はい、シズクとエンはみごとに勝利をおさめました。

シズク「むしろ、負けたらどんな風に話が進むのかを見てみたいもんだよ（笑）」

エン「うん。それはそれで面白そうだね（笑）」

さて、「雫の探検隊」第一章も、次回で終了です。それでは、次の話の前書きでお会いしましょう。

宝物（前書き）

「雫の探検隊」第1章もこの話で終了です。

シズク「とりあえず今年中に終わったね。良くできました（笑）」

な、なんだその上から目線の言い方は！？（怒）

エン「終わらせるのが遅いからだよ。もう冬休みに入ってるから、もっとハイペースになってもいいってこと。」

冬休みだろうが工業高校生は忙しいんだよ！！もう少し察しろよ！
！（怒）

シズク「工業高校生に限った話じゃないと思うけどね。というより、本当に忙しかったら、こんな所で道草してないよね？」

うっ………そ、それは………（汗）

宝物

「うっ……くそ……」

「あ……あちい……」

全身焦げあとだらけで地面に横たわりながら、ガスとバットがうめいている。

「まだ……やるかい……?」

そんな二人に、シズクが青い顔で息を切らしながら言った。
すると次にエンが、

「どう?まだ弱虫なんて言える?」

と笑みを浮かべながら言った。

ガスとバットはふらふらと起き上がるとそれぞれ、

「くそっ、覚えてやがれ!!」

「次に会った時は覚悟しろよ!!」

と捨てぜりふを吐き、一目散にシズクとエンの後ろにある出口へと逃げていった。

二人は見えなくなるまでガスとバットを目で追った。

「あ……」

その直後、シズクはドサリと地面に倒れた。

「えっ？…あっ！！シズク！！」

振り向いたエンが、驚いてシズクに駆け寄った。

シズクはエンと目を合わせると、弱々しい声で言った。

「ごめん…エン…僕もう…持ちそうに…ないよ…毒が…効いてきた…。」

「も、持ちそうにない…！？いやだよ！！シズク、死なないで！！」

エンが涙声で叫んだ。

しかし、真っ青な顔をしたシズクのまぶたは、少しずつ下りていく。

「そ、そんな…！！どうしよう…ん？」

エンは何かないかと辺りを見渡し、放り出されたきり、手をつけられていなかった自分のウエストバッグ　彼の宝物　を見つけた。

「そうだ！！これだ！！」

エンは急いでバッグに近づき開けると、中から水が入った容器と、少量の淡い紫色の粉が入った袋を取り出して、

「良かった、まだ残ってた…。」

と言った。

そして小さな手を器用に使って、その容器に粉を全部入れて軽く振って水に溶かし、薄紫色の液体を作った。それをシズクの元に持つ

ていき、ほとんど意識が無い彼をあお向けにし、わずかに開いた口に流しこんだ。

すると、シズクの顔色がみるみる良くなっていき、やがてほとんど閉じかけていた目を開けた。

「う……エン……。」

シズクがエンと目を合わせてつぶやいた。
その瞬間、

「シズク！！良かったあ~~~~！！」

エンが安堵と喜びで叫んだ。

シズクは起き上がり、不思議そうに身体を見渡した。

「さっきまであんなに苦しかったのに……それに、身体中の痛みもウソみたいに消えた……。」

「薬が効いたみたいだね。」

エンがそう言うと、シズクが首をかしげた。

「薬？」

「うん。ボクが木の実を調合して作った薬が残ってたから、それを使ったんだ。解毒効果と治癒効果がある薬をね。」

エンが説明した。

それを聞いて、シズクが驚いた表情をした。

「君が調べたのかい！？すごいね！！」

「そ、そんなことないよ……。」

シズクにほめられ、エンは照れた。

そしてシズクは辺りを見渡し、最後にエンと目を合わせて言った。

「こんな所で長話をするのもなんだし、とりあえず外に出ようか？」

「うん、そうだね。」

エンは答えると、出口に向かって歩きだした。

しかしシズクは動かず、片方の眉をつり上げて言った。

「宝物をおいて行くつもりかい？」

「あっ！！忘れてた！！」

エンは慌てて戻り、バッグを腰に巻いた。

それを見たあとシズクはうなずき、そして二人は海岸の洞窟をあとにした。

洞窟を出ると、もう夕方だった。

既に太陽の半分が水平線に沈んでいた。

その空に、海岸ではどこからか集まってきたクラブという赤いカニの姿をしたポケモンが、無数の泡を吹いていた。

洞窟から出てきた二人は、泡が飛ぶ夕日の空を見た。

「わあ、きれいだな〜。」

エンが目を輝かせながら言った。

「確かにきれいだね。」

シズクもうなずきながら言うと、エンが続けた。

「ボク、この景色がすごく好きなんだ。この景色を見ていると、なんだか落ち着くんだよ。」

「それ、分かる気がする。僕も落ち着いてきたよ。」

シズクが答えた。

そしてエンを見ると、言った。

「ありがとう、エン。君のおかげで助かったよ。」

エンはシズクの方を向き、優しい笑顔で答えた。

「礼を言うのはボクの方だよ。キミが手伝ってくれたから、ボクは宝物を取り返せたんだよ。」

そう言われて、シズクも笑みを返した。

シズクが今度は質問した。

「ところで、薬を調合したとか言ってたけれど、もしかして君って薬剤師なのかい？」

「ううん。カーボおじいさんが教えてくれたんだ。」

エンは首を横に振った。

「カーボおじいさん？」

シズクがまた質問した。

「ボクの保護者にあたるポケモンで、コータスっていう種族なんだ。血縁関係は無いけどね。」

「血縁関係が…無い？」

エンの答えに、シズクが眉をひそめた。

するとエンは表情をくもらせ、少しだけうつむいて言った。

「ボク、お父さんもお母さんもないんだ。物心付いたときにはもうカーボおじいさんのもとにいて、顔さえも知らないんだ。聞いた話によると、お母さんは分からないけれど、お父さんはボクを捨ててどこかに行っちゃったらしいんだ。」

「ひどい……どうしてそんなことを……。」

シズクが険しい表情をしながら言った。

「分からないよ。でも、きっと何か深い事情があったんだよ。」

そう言ったエンのその確信した表情を不思議に思い、シズクが尋ねた。

「なんでそんなことが言えるんだい？」

するとエンは、バッグからあの石のかけらを取りだし、シズクに見せた。

「これがあるから。ボクは遺跡のかけらって呼んでるんだけど、一見ただの石のように見えるでしょ？けれど、この平べったい所見
て。」

「…あ、何かの模様が…：こんな模様、見たことない。」

シズクがあの特徴的な模様を見ながら言うと、エンはさらに自分の腰に巻いてあるウエストバッグを軽く叩いて言った。

「あとはこのウエストバッグ。この二つはボクが物心付いたときからあった。話によると、ウエストバッグはお父さんが着けていたらしいんだ。」

それを聞いて察したシズクがうなずいた。

「なるほど、確かに単純じゃなさそうな匂いがするね。」

そのあとエンは海の方を向き、遠い目をした。

「お父さんがボクを捨ててどこに行ったのか、なんでこの二つをボクに残したのか…何か意味があると思うんだ。」

「エン……………」

シズクがつぶやくと、エンが続けた。

「だから、この遺跡のかけらの謎が解ければ何か分かると思って、その謎を解くためにはあちこち探検できる探検隊になるのが一番いいと思って、でも素人のボクじゃ探検なんてとてもできないから、探検に必要な知識や技術を身につけるために、探検隊のギルドに弟子入りしたいんだけど……」

ここでエンは、再び表情をくもらせてうつむいた。

「ボク臆病で…いつも弟子入りする前に逃げ帰っちゃうんだ。自分でも悔しいよ。」

落ち込みぎみのエンに、シズクが励ますために言った。

「そうには見えなかったけどね。あの二人…ガスとバットだったかな？と戦っていた時の君は、かなり勇ましかったよ？」

「それはキミがいたから心強かったからで……あ、そうだ！！」

エンが反論しようとしてひらめいた。

「ねえシズク、ボクと一緒にギルドに弟子入りしてくれない？」

「えっ!？」

シズクが驚く。

「一人じゃ無理でも、キミと一緒になら弟子入りできる気がするんだ。」

「

「……僕なんかで本当にいいのかい？」

シズクが謙遜して言うと、エンがうなずいた。

「むしろキミだからこそ…信じれるキミだからこそ頼めるんだ。お願いシズク、ボクと一緒にギルドに弟子入りして！」

シズクは腕を組んで考えた。
そしてしばらく考えた末、結論を出した。

「うん。君には命を助けてもらったし、行くあてもないし、それに僕がゼニガメになった理由に関して冒険で何か情報を得れるかもしれないしね。君と一緒にギルドに弟子入りするよ。」

するとエンは、飛び上がって喜んだ。

「本当！？やった〜！！ボク達きつといいパートナー同士になるよ！！ありがとう、シズク！！」

「パートナーか…そうだね。」

シズクはその部分を繰り返した。

するとエンは突然真顔になり、言った。

「じゃあ、早速行こう。」

そのままの表情で足を進めるエンに、シズクは黙ってついていった。

宝物（後書き）

はい、第1章終了です。ふっ、これで「葉の救助隊」の執筆を再開できる。

エン「作者、こんな所で裏話しないで。（汗）」

シズク「「葉の救助隊」って？」

ああ、君たちのとは別に僕が執筆してる小説。「雫の探検隊」執筆にあたって、二つの小説を同時進行させたかったから、この第1章が終わるまで更新停止してたんだよ。だから、今日から再開できると思ってね。

シズク「なるほど。」

エン「また話が進む速度が落ちるの？」

んっ、まあ、少なからずね（笑）

シズク・エン「はあ~~~~~」

そんなにため息つかない！二人して……。

という訳で、「葉の救助隊」執筆を、本日をもって再開させていただきます。さらに、もう一つお知らせがあるのですが、それは活動報告の方で……こっご期待！！では、僕はこれで。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2076z/>

ポケモン不思議のダンジョン～雫の探検隊～

2011年12月26日00時54分発行